

人には、そこに至る、その人の人生がありま
す。そして、人の人生は小さいことででき
ているものです。

できたことよりも、できなかった多くのこ
と、言い出せなかつたこと、かなわなかつた
こと、しくじつたこと、助けられたこと、迷
惑をかけたこと、それらの小さいことは陰に
隠れて計ることができないのです。

しかし、それらの小さいことの方がその人
を創り、その人が他の人とは違い、かけがえ
のないものであることを創り出しているのだ
です。

人がその人の作り出したもので計られるな
ら、人はその目盛り能耐えられないもので
人が得たもの、人が人や世の中に評価され
たことは失われるものだからです。

この主イエスの目盛りは、「先の者は後に」
であり、「小さい者」に向かいます。

例えば「はつきり言っておく。わたしの弟
子だという理由で、この小さな者の一人に、
冷たい水一杯でも飲ませてくれる人は、必ず
その報いを受ける。」(一〇章四二節)、「自分
を低くして、この子供のようになる人が、天
の国でいちばん偉いのだ。」(二八章四節)、
「たれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる
者は高められる。」(二三章一二節)といわれ
ています。主がご覧になるのは人とはむしろ
反対の向きになるのです。

主人は「不当なことはしていない、一デナ
リオンの約束をしたのだ。この最後の者にも
同じように支払ってやりたい」と後の者にも
同じものを与えようとしています。主は自分の
ものを自分のしたいようになさいませぬ。神の恵
みは神の御心によつてもたらされるからです。

同じように支払う、それは同じように愛され
るといふことです。そうであれば、かえつて
小さい者の方がその恵みを知ることができる
のです。自分は恵みを受けた。それは自分で
自分は小さいことがわかる時です。そのとき
には、神の恵みの大きさを知ることになりま
す。

主なる神の恵みは自由な御心によるもので
す。主なる神がお与えになる恵みは罪の救い
です。それは罪人の人生と命を罪の赦しによつ
て主に受け入れられるという恵みです。主は
それを「わたしの気前のよさ」と言われます。

主人は早朝からぎりぎりまで人を集めまし
た。仕事にあぶれた者に声をかけ、自分のぶ
どう園に受け入れられました。夕方まで仕事がな
かつた人というのは、一日を無駄にし、明日
の生活が不安になります。家族がいる場合は
一層です。しかし、彼は何もできずにいたの
です。この主人の目はそこに向かいます。何
よりもぶどう園に入って働くことが必要だか
らです。旧約聖書でぶどう園は、イスラエル、
つまり神の民の共同体を指すものです。

そして、ぶどう園に入ればその主人のため
に働きその恵みがお与えられます。それは生き
る恵みです。主の御許に生きる恵みは、先
の者が後になり、高い者が低くされるところで
す。それは、信仰者にとつては悔い改めと罪
の赦しによつてもたらされるものです。

主は「わたしの気前のよさをねたむのか。」
と言われます。人のものさしは不平と妬みをも
たらしてきました。比較が基本になるから
です。主の慈しみは比べて分かるわけではあ
りませぬ。主が自分に語りかけられ、自分が
声をかけられて呼ばれたことで分かります。

それが主の慈しみを知る道です。教会にはこ
の道が与えられています。教会はぶどう園に
たとえられている神の民の共同体です。

礼拝は御言葉によつて成り立っています。
主が招かれ、語りかけられる御言葉です。わ
たしたちは教会に招き入れられ、礼拝に呼び
集められてきました。ぶどう園の主人が何度
も探し出してくださつたようにして、わたし
たちも入れられているのです。自分の小ささ
を認めることは、一層恵みの大きさを知るこ
とになるのです。

(一月二一日 公同礼拝)

二〇二三年二月講壇一覽

第一主日(二月三日)

「実現する御言葉」 アドベント第一主日礼拝
高橋和人牧師

詩編 六二・二〇・一三
ルカ 一・五〇・二五

第二主日(二月一〇日)

「神にできないことは何一つない」 アドベント第二主日礼拝
姜俔米牧師

詩編 八五・九〇・一四
ルカ 一・二六・三八

第三主日(二月一七日)

「主をあがめる魂」 アドベント第三主日礼拝
高橋和人牧師

詩編 三五・九〇・一〇
ルカ 一・四六・五六